

優秀賞



伝統のバトン

秋田県横手市立横手明峰中学校

二年 今 仲 野乃佳

連綿と受け継がれる命のように、私たちの地域に昔から受け継がれている一つの行事がある。それは、私の町にある神社のお祭りだ。そして私はその祭りでお神楽をあげる巫女、つまり舞姫を務めている。

この舞姫は、地元の学校に通う小学六年生から中学三年生までの美女？四人で構成されている。毎年中学三年生が引退すると、その代わりに新しく小学生が補充されるというシステムが、この少子化の時代でも人手不足になることなく続けてこられた一つの秘訣だ。

私も知り合いのお姉さんからやってみたいかと誘われた口なのだが、そのときはアイドルグループのメンバーにでも選ばれたかのように有頂天になり、ろくに考えもせず安請け合いをしてしまった。

しかし、いざお神楽の練習をしてみると、想像していたのとは雲泥の差で、その大変さに驚いてしまった。そもそも、衣装を着るのさえひと苦労だ。しかも、あまり体の大きくなかった私は、袴の裾をどうしても引きずり気味になってしまい、二、三歩歩くだけでもとても姫とは呼べないぶざまな格好になるのだった。

それでも転びそうになるのを何とかこらえながらお神楽の練習をするのだが、歩くのさえまならな

いのに舞など上手に踊れるはずもない。上手に舞っている先輩のお姉さん三人に愛想を尽かされないかと、顔色をうかがいながら必死に練習に取り組んだ。

また、お神楽を舞うことに必要なのは、動きを覚えることだけではない。「浦安の舞」で使う檜扇や鉦鈴の所作をマスターすることもとても大切で、普段使ったことのないそれらの道具を華麗に使うためには、よほどの熟練が必要だと感じた。

そしてさらに、私を戸惑わせたものがある。それは、あの雅楽独特のゆっくりとしたリズムだ。ゆっくりなんだから簡単だろうと思う人もいるかもしれないが、実はそうではない。ゆっくりである分かえって指先や足先まで神経を集中させて踊ることが大切で、他の三人との息もぴたりと合わせなければならぬ。リズムがゆったりしている分、今はやりのヒップホップなどのダンスに比べて自分一人のちよつとしたズレがやたらと目立ってしまうのだ。

とにかく想像以上に過酷な舞に、「こんなことを四年間も務めていけるのだろうか？」と自信を失い、私は早々にギブアップしそうになっていた。

しかしそんなとき支えてくれたのが、舞姫の仲間であり先輩のお姉さんたち、そして家での練習に付き合ってくれた母や祖母の温かい励みだった。

私が何度失敗しても笑顔で教えてくれる先輩たち。仕事で疲れているはずなのに、家での練習にも付き合ってくれ、時にはアドバイスもしてくれた家族。そんなたくさんの思いやりに支えられて私はどうかこうにか「浦安」と「豊栄」の二つの舞をマスターすることができた。

ところが五月のお祭り当日、私にもう一つの難題が持ち上がった。それは…、緊張だ。

本番に近づくとつれ、今までに失敗したことや自信のないところが次々と脳裏に浮かび、どうしようもないほどに緊張してしまったのだ。

雅楽特有のあの笙の音が鳴る。普通はあの音色を聞くだけで眠気が襲ってくるはずなのに、私の心臓はドキンと鳴った。ゆっくりと舞台に進む。幸い裾を踏んづけてずっこけることなく所定の位置について、思ったよりもたくさんの人が神社に集まっていた。見守ってくれているはずの母や祖母がどこにいるのかも分からないのが、さらに私を不安にさせた。しかし大きく息を吸い、先輩たち三人に合わせて無我夢中で舞った。正直その後のことはあまり良く覚えていない。気がついたときはもう終わっていて、練習のときよりも数倍早く終わったような気がする。

すべての神事が終了すると、お神楽の先生や先輩方、そして見てくださった方々に「一年目なのにすごいね。よく頑張ったよ」と褒めていただき、ようやく達成感が湧いてきた。

この挑戦をしてから私は、学校生活の中でも成長を実感することがある。授業でも以前はあまり自信を持って発表することができなかったが、今では失敗や間違いを恐れず発表できるようにもなった。

しかし来年は中学三年生、今までのしきたりに従えば、中学を卒業と同時に舞姫も卒業となる。だから私は、今度は自らの経験を伝え次の舞姫を育てていく側にならなければならない。連綿と受け継がれる地域の行事とともに舞姫のバトンもしっかりとつないでいくことが、きっと私のさらなる成長を後押ししてくれるに違いない。そんなワクワクした気持ちで今私の胸に大きく膨らんでいる。